

特集・外交史料館開館五〇周年

座談会 開館当時に振り返って

—— 外交史料館は、令和三(二〇二一)年四月に、開館五〇年を迎えました。そこで本日は、開館当初に外交史料館におられた、原口邦紘さん、内藤和寿さんのお二人をお招きして、開館の頃を中心に、当時の雰囲気や、どのようなご苦労があったのかなど、紙に残らないようなことをお話しいただいて、それを記録にとどめておきたいと思っています。

原口さんは、開館当初から『日本外交文書』の編纂担当官として勤務され、その後、外交記録公開にも深く携わられました。そして最後には外交史料館の副館長を務められました。外交史料の内容面に関するお仕事を中心に、史料館の体制面でも尽力されてこられた方です。また内藤さんは、閲覧事務の担当官として勤務され、開館当初から長く閲覧・レファレンス業務を中核的に支え、最後は閲覧室長を務められました。どのような文書がどのファイルに収録されているのかに精通されており、他の館員からとても頼りにされる存在でした。

元副館長 原口邦紘
元閲覧室長 内藤和寿

では早速ですが、開館当時、お二人がどのように史料館に関わられたのか、ご経歴なども絡めながら、当時の様子をお話してください。まずは原口さんからお願います。

外交史料館との関わり

原口(元外交史料館副館長) 五〇年前というと、ふと考えたら、自分では若いつもりでも、あのときに在籍していたのは、今や内藤さんと私を含め、数えるほどしかないのだと、改めて半世紀だなど感じました。当時は二人ともまだ二〇代で、一番の若手でした。

私が外務省に入省したのは、開館の前年、昭和四五(一九七〇)年の九月一日です。外務事務官の辞令をもらったのですが、編纂に従事する者ということで、特別任用の形で採用されたわけです。それまで、私は九州大学の大学院博士課程におりました。国史専攻です。そこにたまたま臼井勝美先生が、東京の電気通信大学から九大に移ってこられたのです。当時は、学園紛争が盛んな時期でしたが、



原口 邦紘 元副館長

板付という米軍基地のジェット機が、ちょうど建設中だった九大の電算機センターの屋上に墜落しました。それをきっかけに、学生運動が活発化して、九州大学の大学院も巻き込まれて、講義が全然行われなくなりました。そういう中で、臼井先生から、東京の『日本外交文書』を編纂している部署で、若い人を一人探しているという話があり、それをお受けして上京し、九月一日に任官しました。私が配属された外交文書室は、当時は国際資料部調査課に所属して、調査課の課長は岡崎（久彦）さんでした。

これは外交文書室の大きな特色なのですが、どんな偉い先生も若手もみんな本当に平等なのです。それは栗原（健）先生の存在が大きいのですけれども、栗原先生をはじめ、細谷（千博）先生以下、みんな書生気質で、そういう雰囲気がありましたね。ですから、私のような地方から出てきた者も、すんなりとその中に入り込みました。それなりに新人を気遣っていただいたのだろうと今からは思いますけれども、私としてはフレッシュな驚きで、こんな

偉い先生方と一緒にいながら、同じような仲間として仕事ができることに幸せを感じました。その頃、外交史料館は建設中でしたので、来春あたりに移るとい話は聞いたのだらうと思いますし、任官する前に臼井先生からもそういう話を聞いていたかもしれませ

んが、その点ははっきりしません。

—— 外交文書室に入られて、そこで初めて内藤さんにお会いになったのですか。

原口 外務本省の建物から、北口を出て左側に行くと、当時そこに耐爆倉庫と呼ばれる、三階建ての古いかにも頑丈な建物があり、入り口に外交文書室、百年史準備室と書かれた標札が掛けられており、そこが私の職場でした。内藤さんは確か、外務省百年史に携わっていて、そこで知り合ったのです。内藤さんはすごく寡黙な印象でしたね。

—— では内藤さん、そのあたりのお話してください。

内藤（元外交史料館閲覧室長） 私は昭和四五年四月、当時は大学の四年生でしたが、外務省の北東アジア課で臨時職員として、週二日ぐらいだったと思うのですが、当時の日韓交渉の記録をファイルに編纂する補助作業をすることになったのです。当初は、北東アジア課の部屋の片隅で仕事をしていましたのですが、その後、耐爆倉庫で作業するようになったのです。耐爆倉庫には、外交文書室とそのほかに栗原先生がおられた外務省百年史の準備室がありまして、百年史の部屋にテーブルと椅子があるから、そちらで北東アジア課の仕事をやるようにということで、耐爆倉庫に移ったわけですね。そのときに原口さんをはじめ、外交文書室の先生方、室長の長岡（新治郎）さんとか、多くの方に初めてお会いしたのです。そして翌年三月に大学を卒業して、そのときに国民外交研究協会と



内藤 和寿 元閲覧室長

—— 財団法人の組織がありまして、四六年四月に外交史料館が開設され、その三階の一室(現在の編纂委員室)に協会の事務室を設けるからということで、そちらで仕事をすることになったのです。のち國學院大學の教授になられた馬場(明)先生が、事務の主任をやっておられました。ただ、協会のいろいろな事務をやる傍ら、閲覧室の仕事も一緒に手伝ってくれということ、普段は閲覧室で仕事をしている時間が多かったのです。

—— 国民外交研究協会では、どのようなお仕事をされていたのですか。

内藤 資料や図書をいろいろ所蔵していましたので、そういったもののリスト作りなどです。ただ、協会がその年の七月ぐらいに解散することになりました。残務整理とか、そういったことをやりました。その後、私も職がなくなったわけですから、引き続き八月でしたか、閲覧室で仕事をやってくれということで、臨時職員という形で採用されたのです。翌四七年四月から事務官として任用されて、そのまま閲覧室で仕事をしました。

—— 外交史料館ができると聞いたときは、どのようなお気持ちでしたか。

内藤 まだ学生でもあったので、イメージがなくて、「そういうもの

ができるんだ」くらいの感覚しかなかったですね。

—— 北東アジア課の仕事は、お一人でなさっていたのですか。

内藤 皆さんも御存じと思うのですが、森田芳夫さんという学者肌の方がおられて、もう一人、女性の事務官がいて、私と三人で日韓交渉記録の編纂作業をやっていたのです。耐爆倉庫に移ったのちは、一人で作業をしましたが、その部屋には栗原先生と、山村(治郎)さんという外交史料館では編纂室に配属された方がいらっしゃったと思うのです。

—— そうすると、同じ耐爆倉庫におられても、お二人は違う仕事でされていたので、内藤さんが史料館に行かれて閲覧室の仕事をされるようになってから、本当の意味で同僚になったわけですね。

内藤 そうですね。

原口 内藤さんの北東アジア課の話は初めて聞きました。百年史室におられて、そこから史料館に入られたと思っていました。

内藤 ただ、栗原先生と同じ部屋で席も近いものですから、百年史の関係の話とか、いろいろなことを話してくださいました(百年史のちに『外務省の百年』として原書房より刊行)。

原口 これは『外務省の百年』に載っています。昭和四〇年頃から、外交関係の史料を国民の利用に供するなどの目的で、財団法人で国民外交会館を建設する計画が起きてきたのですが、いろいろと経緯があつて、結局、外部ではなくて、外務省で外交史料館を造ろうということになった。そこで国民外交会館が、今、内藤さんが言われ

た国民外交研究協会となつて、そして、外交史料館ができた次の年に解散したのですね。つまり最初は、国民外交会館というものを造ろうという機運があつたみたいですね。その流れから、外交史料館ができるのと、三階の一室（現在の会議室）が、応接室みたいになつていまして、そこに外務省のOBの方がよく来ておられました。もう名前はほとんど覚えていないのですけれども、西春彦大使とか田尻愛義さん（元外務次官）といった方々がいらしていました。

—— 開館当初は、一階が閲覧室、二階が館長室と編纂室で、三階には国民外交研究協会の事務局と応接室があつたのですね。

原口　そして、現在は補修室になつている三階の一番奥の部屋に書架があつて、調書類などを置いていました。昭和五年から戦後外交記録の公開が始まるのですが、この一番奥の部屋は、その少し前に戦後記録調査室という名前になりました。鶴我七蔵参与以下、外務省の元大使、総領事、そういうOBの方が来られて、公開内容の審査などを担当していました。ある意味で、外交史料館とは直接関係ない部屋で、本省の文書課の所属だつたと思います。外務省も非常な緊張の下に外交記録公開をスタートするわけですから、ピリピリしてしまいましたね。史料館の人間は何となく本省の戦後記録に近づいてはいけないというような雰囲気を感じていました。当時の史料館は、公開されたマイクロフィルムの戦後記録を閲覧に供するだけの場所だつたわけです。今とは隔世の感があります。

移転時の思い出

—— 本省からの移転作業については、何かご記憶がありますか。

原口　外務省記録およそ四万冊の搬送に関しては、私たちはほとんどタッチしていません。本省の文書課の方で全てやられたと思います。その辺のところは、私たち事務室の移転とは別に、外交史料館開館に当たって一番大きな仕事だつたのだらうと思いますね。

ただ、それとは別に、外交文書室も耐爆倉庫の三階に、外交文書編纂に必要な記録ファイル、現在活用中か、あるいは今後活用する記録ファイルを相当数持つていました。どれくらいあつたかは覚えていませんが、もちろん私たちが手で運ぶのではなくて、運送業者に頼んで運んでもらつたのですけれども、その運び出しの時の雰囲気は覚えていません。

—— そうすると、記録ファイルはすべて業者の手で運ばれたわけですね。

原口　そうです。それが地下の書庫へ配架されたのです。書庫は最初からレール式の書架だつたかな。

内藤　最初はまだ移動式ではなかつたですね。後に電動化されて動くようになったのですけれども、最初は据え置き式の固定式の書架でした。

—— ファイルは結構な数だつたと思いますけれども、可動式でなくてよく入りましたね。

内藤　一部の記録は茗荷谷の外務省研修所にまだ置いてありましたの

で、それを後に電動書架を置いてから、何回かに分けてどんどん入れるようになったのです。

—— 移転作業では、展示室のセッティングにもご苦労があったように伺っていますが、いかがですか。

原口 開館までの移転作業で一番大変だったのは、展示室のセッティングですね。展示室は、海野(芳郎)さんがリーダーとなって大わらわでセットしました。我々が史料館へ引っ越したのは三月中旬ですが、開館の四月一五日まで一か月もなかったのです。開館当日には記念講演会が予定されていましたので、大勢のお客様がお見えになりますから、そのときまでに展示室を仕上げなければならぬということ、諸先輩をはじめ、皆さん一丸となって準備に取り組んだ覚えがあります。これが一番の思い出になっていますね。

展示内容については、四四年一〇月に東急デパートで「日本外交百年展」という展示会を毎日新聞社の主催で行ったのですが、開館当時の展示目録と大体一致するように思うので、これを参考にしたのではないかと思います。

展示室だけではないのですけれども、移転作業は、まさに全体が手作りという感じでした。とりわけ展示室は、本当に一〇〇パーセント手作りでやりましたね。キャプションもタイトルだけで、説明までは手が回りませんでした。

—— 展示史料の量も多かったので、短期間では作業は大変だったでしょうね。白井先生が自ら釘を打ったというような話を聞いたこと

があります。

原口 開館当時の日本外交文書の編纂委員会は、細谷先生が委員長で、小林龍夫先生、白井勝美先生、この三人で構成されていました。白井先生は元々外務省におられた方で、外務省で外交文書の編纂に従事し、『日本外交年表並主要文書』を作られていましたので、開館当時は大学の先生ではありましたが、もう全くの外交文書編纂の一員という感じでした。だから、私たちと同じように、トンカチで釘を打つなど、実際に作業されました。

開館時の編纂室

—— 次に開館当時の陣容をお伺いしたいのですが、ここに当時の館員の全体写真(19頁参照)がありますので、こちらをご覧いただきながら、まずは編纂室から。

原口 当時の外交史料館のメンバーですけれども、本官職員は定員一四名というのがずっと続くのです。最初は一二名ぐらいだったと思います。

編纂室の室長は長岡新治郎さんでした。長岡さんはベテランでしたね。あとは、海野芳郎さん、林正和さん、吉村道男さん、清水秀子さんと、新人が私という陣容です。そのほかに青木要さんという方がおられました。ただ、青木さんは事務方の庶務とか会計とか総務方面をされていました。ほかの編纂室員はそういう事務的な仕事は全然できないので、外交文書室時代から青木さんが一人で予算で

も何でもやってきていました。もともと東洋史専攻の方でしたが非常に貴重な存在でした。私たちが外交文書の編纂に集中できたのも青木さんがおられたからだだと思います。

当時の編纂作業のことを言いますと、編纂のやり方は今とは全然違います。筆耕の担当職員がいたのです。ワープロなどはありませんので、原稿は全て手書きで、二〇〇字詰めの外務省の原稿用紙に手書きで史料を写していました。

—— 筆耕をやる人は何人ぐらいいたのですか。

原口 三人か四人おられたかな。

内藤 名和（道子）さんと小池（さつき）さん。

原口 そうそう、お二人の女性の方が筆耕をされていましたね。それに田玉（昭吉）さんという方もおられました。

内藤 田玉さんは展示室も担当されていた方ですね。

—— 事務官でも若い人たちは筆耕をしたのでしょうか。

原口 清水さんとか、新人の私も筆耕をやりました。

内藤 あと、校閲の方がおられましたね。張間（利春）さんとか。

原口 外交文書の編纂室は、我々事務官と、筆耕をやっておられる方、そして編纂委員の先生方があったわけですが、そのほかに、張間さんという元外交官をはじめ、三人ぐらいの方が編纂室に机を持っておられて、私たちが編纂した原稿をチェックしていました。

内藤 天城（篤治）さんとか、鴻巣（亮吾）さん。

原口 張間さんと天城さんはキャリアの方ですね。そういう一二〇

パーセント外務省の人が校閲をされていた時期がありました。原稿に赤字でいろいろと入って戻ってきたのを覚えています。張間さんは毅然とした方で、なかなか近寄り難い人でした。

この写真は四六年だと思うのですけれども、ここにおられる背の高い人が張間さんです。その隣に栗原先生がおられます。あと、ここにおられる方が、内藤智秀という東洋史の泰斗です。内藤先生は、当時は顧問という形で史料館に来て、我々の質問に答えてくださいました。非常に温厚なおとなしい方でした。

そして真ん中に写っている若い人、この方が総括（のち副館長）の中井浩さんです。後ろに臼井勝美先生も見えます。中井さんは私が入省したときに、耐爆倉庫の外交文書室にすてにおられました。外交史料館が開館して最初の館長は文書課長の橘（敬一）さんの兼任だったのですけれども、実際は中井さんが史料館の運営面、管理面を担当して、本省と連絡を取って、私たちの立場になって考えてくれる方で、非常に貢献された方です。ちょっと体の具合が悪くて、若くして亡くされました。中井さんは館長室に座っておられて、館長用の立派な机があったのに、それには座らず、スチールの机を持ち込んで、横に座っておられました。そういうところもきちっとした方でした。

—— 外交文書の編纂業務は当時、順調だったのですか。刊行の促進という声は当時もあったのだらうと思いますけれども。

原口 編纂の促進は、編纂委員会を通じて細谷先生あたりからもやら

なきゃいけないと言われていて、史料館ができる以前から、それはずっと課題でした。私自身は、任官してすぐに移民関係の編纂を担当するように言われました。実は私は移民史について、はじめは知識ゼロだったのです。大学院時代までは薩琉関係史や、明治初年の琉球処分関係をやって、ほとんど移民のイの字も知らなかったところに言われ、吉村さんを指導官として移民関係の編纂を始めたのです。私が最初に担当したのは大正八年の移民関係でした。

—— 今のお話ですと、移民の編纂をやれといきなり振られたということですが、特に担当の割り振りとか編纂計画みたいなものは、編纂室の中で、例えば長岡先生とかが「君はこれ」みたいなものはある程度あったのですか。

原口 恐らく編纂委員会の先生方と話をしながら計画を立てていたと思います。今みたいにきちっとした、いつまでにこうしてという形での計画はなかったような気がします。だから、ある意味ではのんびりしていたかもしれないですね。

—— では「こんなのをやってみたら」みたいな話が何となく来たという感じですか。

原口 私の場合は移民の担当を命じられて、吉村さんからどの程度指導を受けたかあまり覚えていないのですけれども、いろいろ聞きながらやっていました。私は大正八年から始めたのですが、それまでの流れは既刊の『日本外交文書』の移民関係を見れば分かりますから、それを参考に撰文や標題付けなどを学んでいったのです。もち

ろん編纂室の先輩の皆さん、忙しい中、私の初歩的な質問に丁寧に答えてもらいました。

—— 当時は一年に何冊くらい作られていたのですか。

原口 一年に三冊という目標があったのではないかと記憶しています。—— 当時の人数ですと、校正作業も結構大変だったと思うのですが、それでも、年三冊だと一年中校正をやっているような感じになりますよね。

原口 そうです。『外交史料館報』第五号の長岡さんの寄稿を見ると、四六年の史料館への移転のときに、二月から三月の年度末の移転と外交文書の刊行が重なって、大変苦勞された話が出ていますが、校了まで外交文書室の引越しを延ばしてほしいと申し入れたということも聞きました。外交文書室は、命をかけたというとおおげさかもしれませんが、そのような意気込みで、みんな集中してやっていたのです。そこに展示室の仕事も入ってきたわけですから、開館の頃の苦勞は並大抵なものではなかったわけです。

開館時の閲覧室

—— では、次に内藤さんから、閲覧室の陣容をお話してください。

内藤 一階の閲覧室は、事務官が五名、栗原先生が室長という形で、その下に戸川(雪江)さん、もう亡くなられました。あと河村(一夫)さん、島津(治香)さん、戸田(ふさ子)さんという方がいました。皆さんが御存じなのは、栗原先生と河村さん辺りでしょうが



旧閲覧室（現在の閲覧事務室）

—— O Bの方ですか。

内藤 当時はまだ現職でした。

原口 すごい職人技の人でしたね。

—— 開館当初は、現在の閲覧室の場所に展示室がありましたから、閲覧室は今のところにはなかったのですね。

内藤 閲覧室は現在の閲覧事務室の中に、キャビネで仕切って、半分が事務室、半分が閲覧室という形でやっていました。

当初は、閲覧者もそんなに多くなかったのですが、閲覧に来られる方は、まず栗原先生の方に通されて、それで栗原先生と対面して、その史料だったらこういうものとか、いろいろ学問的な見地と、記録的な見地からサジェストがあつて、それから閲覧に入るといふ感じでした。あと、戸川さんという方もそれまでは本省の記録室にお

ね。あと、臨時職員として小川さんという女性の方と私。

それと当時、本省の文書課で記録ファイルの補修などをやられていた山口さんという年配の方がいらつしやるのですが、その方が週に一回ぐらいの割合で史料館に向いてきてくれて、ファイルの紐綴じなどを担当してもらっていましたね。

られて、記録ファイルについてすごく詳しい方だったので。ですから、栗原先生と戸川さんの二人で、来館される方の見たいという史料が大体特定されるということですね。

閲覧の受付は、皆さん当番制でやって、私なんかは書庫に行つて言われたファイルを持つてくるのですけれども、当時はまだリフトとかエレベーターがなかったものだから、まずは一階から階段を下りて、そこから台車で地下の書庫に行つて運んできて、階段は手で持つてということで、それを繰り返していました。鳥津さん、戸田さん、その中であつて私が一番若いということで、結構運びましたね。

—— 出すだけではなく、片づける方もあるので、大変だったでしょうね。

内藤 片づけもありますし、あと、山口さんが綴じたファイルの配架もありましたので、結構な量になりますね。それと、当時は未整理文書も結構あつたものだから、それを分類して新たなファイルを作つたり、あるいは既にあるファイルに合つた文書を挟んだり、そんな仕事もしていました。

原口 内藤さんが編綴されたファイルは随分たくさんあります。

内藤 開館から少し経つてから、小さいリフトが設置されました。一度に五、六冊ぐらしか入らないリフトですね。

原口 あれは、下にファイルが落ちてしまつたりして、大変でしたね。

内藤 その後、さらに経つてから、エレベーターができたのです。

—— その頃の利用者の数はいかがでしたか。

内藤 利用者はそんなに多くなかったですね。今ほどではないです。当時は、学者、研究者、外務省のOBといった方々が主流でした。当時、鹿島平和研究所で『日本外交史』というのをつくっていただいて、それで元大使の方、鈴木九萬さんとか、別府節弥さんとか、錚々たる元大使の方々が栗原先生を訪ねて、いろいろとアドバイスを受け、場合によっては史料を見たりされていましたね。

原口 栗原先生というのは最初から今に至るまで、本当に外交史料館の礎であり、柱であり、影響を与えている人ですね。

今の話を補足しますと、戸川雪江さんという方は、記録編纂のベテランだったのですけれども、まさにその後継者が内藤さんなのです。戸川さんと一緒に仕事をされて、ずっと史料館の外交史料の編纂、整理に当たられた。内藤さんに聞けば何でも分かるというまさに「生き字引」です。

内藤 戸川さんは仕事は結構厳しい人で、時々テストをされるのです。この関係の史料を見たいのだが、それにふさわしい記録ファイルはどこにあるか、分類番号の幾つと幾つか。そういうのを時々テストされる。目録を調べて答えを持っていくと、これでは駄目だとか、いろいろお叱りをいただく。そんなこともありましたが、でも、仕事を離れるととても良くしていただきました。

—— 戸川さんという方は、記録の分類が全部頭に入っている感じだったのですか。それともたたくさんのメモを書かれて、それが積み

上がっているみたいなやり方だったのですか。

内藤 当時、「アルファベット目録」というのがあったのです。そこに戸川さんをはじめ、当時の記録室におられた方々が、いろいろな書き込みを入れていたと思うのです。

—— 戸川さんは、元々歴史史料の専門家というわけではなく、外務省に入られたのちに文書課に配属されて、そのお仕事なので記録に熟知されたわけですね。

内藤 そうです。記録室に長くおられて、その間に知識を蓄積されたということですね。

原口 非常に優秀な方でしたね。話が少し横道にそれますが、本省の各課や在外公館では、文書の整理まで手が回らない。外務省は、御存じのようにアーカイブになるまで、きちっとした記録編集の作業があったわけですが、戸川さんは本省内もさることながら、在外公館の書庫の整理、文書の整理に何回か行っておられましたね。今はないと思いますけれども、そういう指導にも行かれた専門家でした。仕事には厳しい反面、若い人の面倒見も非常にいい人でしたね。

レファレンス対応

—— 栗原先生がアーキビスト的な視点で、いろいろと相談に乗っていったという点ですが、外国の研究者のなかにも、栗原先生から教えを受けた方がたくさんいらっしゃると思います。開館当時も外

国から研究者がいらしていたのですか。

内藤 史料館ができる以前から来られていた方もいらっしゃっています。イアン・ニッシュ先生とかは、開館以前から来られていますね。あとは細谷先生などから紹介を受けて来られた方もおられました。

—— 最近いらっしゃる外国の方には、基本的に日本語が読めない方もおられたりするのですが、当時いらした外国の研究者の方は、日本語でお話をされて、史料を御覧になっていたのですか。

内藤 そうですね。会話もかなり流暢な日本語で話されていました。史料を読むに当たって、まずそれが前提でしょうね。

—— それは欧米の方もアジアの方も幅広く、そうだったのですか。
内藤 そうですね。

—— その頃は、来館者へのレファレンスが中心ですか。今ですと、メールや手紙など、様々な照会がありますか。

内藤 当時だと手紙か電話くらいですかね。とにかく史料館という存在自体があまり広く知られていなかったので、研究者とか、ある一部の人たちだけでしたね。

—— いろいろな段々と利用者が増えたのですか。

内藤 利用者が多くなったのは、昭和五年の戦後外交記録公開以降だと思います。

原口 戦後外交記録公開が五年に始まって、外交史料館も少しずつ知られるようになりました。それまでは、外交史などの専門の先生

方が中心で、一般国民の方が来館することはあまりなかったのです。研究者がよく言っていたのは、外交史料館は宝の山だと。つまり、目録で公表しているのはファイル名だけで、一文書一文書ごとの細かい目録はないわけです。従って、史料館に来て、自分の見たい史料を栗原先生辺りから教えられながらファイルを開くまでは、何が入っているか分からない。研究者としてわくわくする宝の山だと、何人かの先生からお聞きしました。しかし、それはとりもなおさず、一般の人にはなかなか分からないということになるわけです。だから、今とはかなり違う時代だったと思います。

—— 閲覧室の受付について、何か思い出すエピソードはありますか。
内藤 ファイルが出てくるのが遅いとか、そういう苦情はよくありましたね。

—— 人数が少ないからですか。

内藤 それもありますが、誤配架で、所定の場所ではないところにファイルが収められていることがたまにあつて、見つけ出すのが大変だったこともありましたね。

—— 閲覧者への対応では、人員が不足しているなかでは難しい面もあったとは思いますが、ユーザーフレンドリーというか、手厚く利用者に対応しようという伝統が、閲覧室にはずっとあったように思えます。内藤さん、その点はいかがですか。

内藤 史料館ができる前も、一部の研究者の人たちは、細谷先生などもそうですけれども、外務省記録を見ることができたわけです。そ

の頃からフレンドリーに対応するという伝統があったと思うので
す。史料館ができてからも、栗原先生をはじめ、戸川さんとかも丁
寧に対応していましたので、それが続いていたと思いますね。

——上の人たちがやっているのを見て、下の人たちもそのように
対応しようと心がける。それが史料館のレファレンスの伝統になっ
ているということですね。

原口 それは本当にそうですね。その精神だけは引き継いでほしいで
すね。私は去年三、四回ほど閲覧室で閲覧したのですけれども、一
般の閲覧者として初めて経験した感想を申し上げますと、昔みたい
なきめ細かい対応はもう不可能ですよ。でも、そういう精神が生
きていると思ったのは、利用者の立場を考えた形に、閲覧室のサー
ビスもどんどん変わってきていると感じたからです。

大きな変化は、デジタルカメラで史料を撮影できるようになった
こと。これは大変なことですよ。昔はとにかく複写代が高過ぎると、
そういう声をよく聞きました。もちろん、デジタルなどない時代で
したから、業者に複写を頼むわけですが、その料金がとにかく高過
ぎるという声でした。

——業者が写真に撮るといことは、史料が傷まないようにしたい
という気持ちがあったからですね。

原口 今でもそうだと思いますが、昔もそれが一番の理由です。アメ
リカの国立公文書館で調査したときに、あそこは分類された箱に収
納された原記録を、閲覧者が自分でゼロックス・コピーできるので

便利なのですが、一年後、二年後に行つて同じファイルを見ること
があると、随分傷んでいると感じるわけです。ですから、史料を痛
めないためには、業者がきちんとした写真撮影をしなければならな
い。しかしそうすると一枚の料金がすごく高くなるわけです。研究
者の中にはとにかく読めればいいという声もありましたし、ご自分
で筆写される方も多かったですね。それが今は、閲覧室を見ている
と手書きで写している人はほとんどいません。みんなデジタルで撮
影するか、あるいはマイクロリーダーにコインを入れてプリントア
ウトしています。大きな変化だと感じますし、自分も一閲覧者とし
て利用して、とても便利だと思いました。昔と比べると雲泥の差で
すね。

——業者に依頼する複写サービスは、現在も続いていますか、開館
当時はどうでしたか。

内藤 開館当時から、複写は国際マイクロが担当していました、一階
から地下へ降りていく階段を下りたすぐのところ部屋があります
が、あそこで作業をしていました。

——それは開館したときからあったのですか。
内藤 最初からあったと思います。

講堂の活用と史料の取扱

原口 国際マイクロとは、外交文書室が本省で史料を写真に撮ってい
た頃からですから、六〇年以上の付き合いですね。今、内藤さんが

言われましたけれども、地下へ階段を下りた真正面に現像室がありました。カメラが二台と、現像までできる機械が置いてあったのです。史料館ができてすぐだったと思いますが、館員が自前で撮影する構想があったのでしょうか。ただし、一度もそういうことをやろうという話は起きなかったのです。もったいないからいじってみようというので、私と内藤さんで操作をした記憶があります。

史料館の設備面では、二階にある講堂の立派さには、史料館に初めて来て、ただただ驚いた思い出があります。それと展示室の立派さにも驚きました。それに対して、がっかりしたのは地下の書庫ですね。コンクリがむき出しで、書架も可動式ではなかった。私は元々近世史の史料を扱っていたものですから、史料保存の観点からすると、これは何だという印象を受けました。非常にショックを受けた覚えがあります。書庫はその後、史料管理の面では皆さん本当に苦労されてきたと思います。設備面では、講堂の有効活用がいつも言われていました。こんなに立派な設備があるのだから、有効に活用しようということです。

—— 講堂の有効活用ということだと、講演会を頻繁におやりになったのではないですか。

原口 外交史の講演会は、『外交史料館報』にも記録として残っていますが、開館当日に行われた細谷先生の講演「歴史の教訓」をスタートに、当初は年に数回やっていました。

内藤 結構頻繁にやっていましたね。三笠宮崇仁殿下もいらして、殿

下の専門のところですからけれども、「人類最古のシユメール文明」について話されました。

原口 三笠宮殿下は非常に立派な方で、講演も素晴らしかったですね。内藤 私が覚えているのは、外務省に省員の奥様方の親睦団体で、外務省夫人の会というのがありまして、そこが外部から美術関係の先生とか、いろいろな講師をお招きしてお話を聞くという講演会を、年に何回かやって、史料館の講堂を貸した記憶がありますね。

原口 講堂について言うと、外交史料館というのは最初、国民外交会館の構想があったように、国内広報の観点も強かったようです。外務省は日本国内に広報する手段が何もない、外国にだけ向いているとの意見があり、国内広報に向けた設備をつくらなければいけないということ、立派な講堂ができたと聞いています。ですからもつと活用しなさいという話になったのだらうと思います。

—— 史料を大切に保管するという点では、現在も補修作業を行っています。先ほどのお話で、紐綴じにいられた方がおられたということがありますけれども、当時、史料保存の面については、いかがだったのでしょうか。

内藤 先ほど話したように、山口さんという人が週に一回ぐらい来られていました。その後は、非常勤職員一名で対応していましたが、修復に関する高度な技術というところまでは行っていなかったです。修復の意識も当時はなかったですね。ただし、史料を大切に扱うという気持ちはありましたね。

—— 閲覧室では、インクのペンは使用禁止という決まりがあります
が、それは開館当初から、そのような意識だったのですか。

内藤 そうですね。

原口 厳しかったですね。当時から鉛筆しか使つてはいけないという
張り紙があつた。

内藤 学者や研究者の方々は、史料を大切にするという考えが初めか
らありますけれども、一般の方ですね。人によっては指をなめて史
料をめくる方がいますので、その場合は注意したことはありますね。

—— カウンター業務はどのように行つていたのですか。

内藤 今みたいに時間制限はありません。カウンターで請求を受ける
と、いつでも次から次へとどんどん出架してました。時間制限な
しで、お昼もやっていましたからね。

—— それですと、出架は相当大変だったのではないですか。

内藤 結構な作業になります。それと目録も件名と冊数だけなので、
閲覧者もぱつと見て、ああこれは要らない、次はこれという感じで、
次々と請求を出されました。

—— いつ頃から、これでは回らないと考えるようになったのですか。
内藤 開館から五、六年ぐらい経つてからでしょうか。一回何冊以内
とか、だんだんそういうルールになっていきました。

史料検索手段の発展

—— 閲覧室にあつた目録は、最初はカード式でしたね。

内藤 カードを手書きしたのです。事務用の目録はあるのですが、そ
れを見ながら、カードに一枚一枚書いていきました。

原口 すべて手作りです。今みたいにパソコンはないですからね。長
い間、カード式の目録が続きましたが、その後、明治大正期と昭和
戦前期の外務省記録について、印刷製本された冊子体の目録〔外
交史料館所蔵 外務省記録総目録〔戦前期〕全三巻〕が作られ、
一般の方でも購入できるようになりました。これは外交史料館五〇
年の歴史の中で、画期的な成果ではないかと思えます。私はタツチ
していないのですけれども、あれは大変だったのではないですか。
内藤 目録の作成は、当時の閲覧室長だった若林（芳房）さんをトッ
プに、新見（幸彦）さんや柳下（宙子）さんが中心になって仕事を
されました。

原口 私はこの目録を自宅に持つていて、よく見るのです。外交史料
館の史料はアジア歴史資料センターでほとんどが公開されていま
すが、移民関係についてはアジ歴には公開されていません。それを
見るためには、外交史料館に行けば公開されたファイルを見ることが
ができるわけですが、行く前に大体どういうものがあるか、目録を
見れば手掛かりになります。そういう意味で、目録は史料館の戦前
記録にアクセスするための非常に便利な手段であると思つていま
す。

内藤 今は「所蔵史料検索システム」というのがあつて、インターネッ
トを使って、パソコンで検索できるようになっています。戦後記録

についても、以前は、史料館に来ないとアクセスの手段がなかったわけですが、現在は公開のステータスなども含めて、簡単に調べることができます。

原口 私はつい目録を見てしまいますね。目録は大変いい仕事だと常々思っているのですけれども、刊行されたのはいつでしたか。

内藤 開館二〇年の記念事業の一つとして作られたもので、『日本外交史辞典』の新版と同じ時期ですね。

『日本外交史辞典』と外交文書編纂者会議

—— 『日本外交史辞典』は昭和五四年に刊行されて、平成四年に改訂された新版が出ました。昭和五四年の刊行作業について御記憶のことがあればお話しください。

内藤 細谷先生、池井（優）先生、大畑（篤四郎）先生といった学者の方々が中心で、現在『日本外交文書』の編纂委員長をされている波多野（澄雄）先生が、事務方で仕事をされました。ですから、史料館のほかの事務官が直接お手伝いしたということはあまりなかったのではないかと思うのですが、三階の真ん中の部屋に事務局がありました。

原口 『日本外交史辞典』編纂委員会を、細谷先生を委員長にしてつくったのです。波多野先生は当時、慶應義塾大学の大学院生だったと思うのですが、事務方として常勤していました。波多野先生がいないと完成しなかったというぐらい、事務的な仕事から内容面まで

尽力されました。我々、編纂室員も項目をそれぞれ分担して執筆しました。ですから、直接的には外交史料館の刊行ではありませんが、これはやはり外交史料館の仕事と言ってもいいでしょうね。

—— 各国で外交文書の編纂に携わる人たちの国際会議に、日本から初めて参加されたのは平成六年でしたね。

原口 外交文書編纂者会議は、平成元年に第一回会議がイギリスのロンドンで行われました。その後、日本の外交史料館にも声がかかってきまして、平成六年にカナダのオタワで第三回会議が開催されたときに、初めて日本から、私と当時の編纂室長だった神山（晃令）さんの二人が参加しました。『外交史料館報』の創刊号に吉村道男さんが「外交文書編纂事業の経緯について」というのを書いておられますが、これを主催者のカナダ外務省が全部英訳してくれていたのです。それが参加者全員に配られました。きちんと英訳してあって、これは有難いと主催者の配慮に感謝したものです。会議では我々から、日本の刊行状況や戦後外交記録公開について説明しました。また会場には『日本外交文書』の最新刊が、各国の外交文書とともに並べて展示されました。当方の説明や展示によって、初めて日本の刊行物を知った参加者も多く、ようやく日本の外交文書を世界に示すことができていることでした。ただ、英訳版があれば便利だという意見も出されましたね。各国の参加者とは、同じ編纂に従事する苦労をともしているので、共感できるところが多く、和気藹々とした雰囲気でした。この会議は今でも続いていて、編纂室の方が

毎回参加されているようですが、各国との情報共有はとても大切だ
と思います。

——平成六年にオタワに行かれたときは、原口さんは総務課記録公
開審査室の所属で、外交記録公開のお仕事をされていました。原口
さんのように、史料館と記録公開室の両方で戦後記録の公開に携わ
られた経歴をお持ちの方は珍しいですね。

原口 私戦後記録公開の仕事に携わるようになったきっかけは、オ
タワの日本大使館の勤務（昭和五四―五七年）から編纂室に戻って
からです。戦後記録公開も手伝えと命じられまして、しばらくは外
交文書の編纂と外交記録公開の審査の仕事を掛け持ちでやっていま
した。そのうちに記録公開の方が主になり、結局、足かけ二、三
年にわたり、外交記録公開にタッチすることになったのです。なお、
外交史料館出身といえれば他にも井上勇一氏がいます。

先ほど申し上げたように、外交記録公開が始まった当初は、外交
史料館は公開されたマイクロフィルムを閲覧するだけの場所とし
た。外交史料館の目的の一つには、国民一般への外交知識普及があ
りますから、記録公開でもその方面を充実させたかったのですが、
人数のせいもあり、なかなかできなかったわけです。

一方で、外交記録公開自体もなかなか進まないと随分批判されま
した。それも従事する人間が少ないのが一つの理由でしたが、それ
以外に制度的な問題もありました。現在は昔と違って、記録公開の
制度が整い、外交史料館も公開に関与されているわけですから、

私たちの頃は、外務省の外交記録公開制度は今のようには整ってい
なかったのです。特に法令・規則などはなく、単に決裁書でスター
トしましたので、しつかりした根拠がないまま、公開の可否を原課
と調整するわけですから、その苦労たるや並大抵のものではありません
でした。平成二年、岡田（克也）大臣のときに「外交記録公
開に関する規則」ができませんが、当時あのような規則があれば、も
う少しできたかなと思いますね。

——オタワへ出張されたお話しでしたが、出張で思い出され
ることがありますか。

内藤 地方の展示会へ史料を貸し出すために、携行したことが何度か
ありましたね。

——それは国内だけですか。海外もありましたか。

内藤 国内もあつたし、海外もありましたね。

——史料の貸し出しということですと、行く方と帰る方とあります
が。

内藤 ですから、持っていく人と持ち帰ってくる人と二回行くわけ
ですね。それで一度失敗したのは、神山さんと二人で宮崎に行くこと
になって、羽田から飛行機で行ったのですが、そのときに史料館か
ら史料を持って出たのですけれども、忘れ物をして、急いで引き返
して、何とか間に合ったのですが。

——少し仕事を離れて恐縮ですが、史料館のレクリエーショ
ンという面で、思い出されることがありますか。

内藤 今と言う社員旅行的なものは、年に一回ぐらいありましたね。

それとこれは外務省全体なのですけれども、野球大会とか卓球大会というのがある、史料館もチームをつくって参加しました。

原口 昭和四〇年代、五〇年代の世の中は、今と違って娯楽も少なかつたのですが、外務省内では省内の福利厚生関係の催しの一つに、野球大会があつて、外交史料館もチームで参加しました。波多野先生がピッチャーをやっておられましたよ。また、外交史料館は本省から離れていて、レクリエーションの設備が全然なかつたので、卓球台を購入してもらい、それで休み時間に練習して、省内の卓球大会で優勝したこともあります。

それとレクリエーションで思い出すのは、当時、講堂にあつた映写機の設備ですね。現在は複写サービスのために国際マイクロさんが入っているところに、三五ミリの立派な映写機が二台あつたのです。そして講堂の正面が全自動で開くようになっていて、そこにスクリーンがありました。本来は国内広報の観点からそのような設備が設けられたと思うのですが、当時の史料館にはそれを活用する余裕はありませんでしたね。ただ、国際交流基金から映画フィルムを貸してもらつて、二、三回、館員で映画を見ました、古き良き時代の話です。

内藤 当時はまだ土曜日が勤務日で、半日で終わりだったものですか、土曜の午後に何度か映画を見た記憶があります。私が覚えていたのは『紀ノ川』という司葉子が出ていた映画ですね。

将来に向けた提言

—— 時間も大分過ぎましたので、最後に後輩に伝えておきたいことがあれば、お一人ずつお話しください。

内藤 皆さん、一生懸命やられているし、これ以上何も言うことはないのですけれども、ただ、これからは戦後史料など特にそうすけれども、史料がどんどん増えていきます。それに伴っているいろいろな情報を史料検索システムにアップして、よりよい利用をしていただくためにどうするかとか、いろいろと考えていかななくてはならないと思います。その点で、特に私のような高齢者ですと、そういった電子情報を扱うことはなかなかできないという方もいらっしゃるかと思ひます。そこで、そういった方々でも利用しやすいシステムを構築していただき、多くの方が史料にスムーズにアクセスできるような仕組みを目指してやっていただければと思います。

原口 今、内藤さんが言われたことに尽きるわけですが、自分の経験からすると、外交史料館にいる我々スタッフというのは外交史料という宝の山の上にいるわけです。それで、ある程度一般の方よりは利用しやすいわけですから、できるだけそれを利用して勉強しながら、また館務に貢献していくという姿勢が大切だと思います。私自身、現役時代、こんな宝の山の上に座って何をやってきたのだという自己反省があるものですから、つくづく思います。

もう一つは、開館当初の外交史料館は、まだ本場に知られていな

い存在だった。ところが、五〇年経った現在、今や外交史料館は名実ともに日本の代表的な外交関係史料の公文書館としての地位を確立しており、国内だけでなく、先ほどの外交文書編纂者国際会議はじめ多方面の交流を通して、国際的にも知られているディプロマティック・アーカイブであると思います。

それで、ここで働かれている人、事務官のみならず非常勤の方々もは誇りを持って、素晴らしい環境で働いているのだという自覚を持っていただきたい。私自身があまり自覚していなかった面もあったので、あえて申し上げますと、史料館で仕事ができるということは、本当にこんな幸せなことではないですね。それをいつも留意しながら仕事に励んでいただきたいし、今、内藤さんが言われたように、いろいろな利用者に対するサービスも隔世の感があるわけですが、さらに利用者の立場に立って史料を提供していくという姿勢を心がけていただきたいと思います。

——ではこれで終わりたいと思います。本日はありがとうございます。ありがとうございました。

(令和三年一〇月二九日 於外交史料館会議室)

聞き手…富塚一彦、熱田見子、浜岡鷹行

神山晃令編纂委員、新見幸彦編纂委員が同席



外交史料館開館初期（昭和46年5月）の集合写真

左から、原口邦紘、名和道子、鷲崎千代、小池さつき、清水秀子、内藤和寿、栗原健（レファレンス整理室長）、小川、張間利春、山村治郎、臼井勝美（『日本外交文書』編纂委員）、中井浩（副館長）、勝田千尋（奥）、林正和（手前）、戸田ふさ子、河村一夫、島津治香、戸川雪江、鶴原太吉、内藤智秀、鴻巣亮吾、田玉昭吉、吉村道男、海野芳郎、磯辺勝也、馬場明（敬称略）

内藤・原口を振り返って（内藤・原口）